

～教員おすすめ本～

No. 20

教職教育部
富岡 勝



『評伝大村はま：ことばを育て人を育て』

苅谷夏子 著

【先生からのコメント】

昭和期の52年間、教師も生徒も皆ひたむきに学ぶ授業を追求しつづけた国語教師、大村はまの人生を克明に描いた評伝である。明治・大正・昭和史を生き抜いた一人の人物の物語としても楽しめる。著者の苅谷夏子は、大村の国語授業を中学校で2年半受けた教え子である。大村の授業で培われた「ことばの力」で、ひたむきさと不器用さを併せもつ大村はまの生き様が生き生きと描かれている。大村教室の様子は、大村はま・苅谷夏子・苅谷剛彦の共著『教えることの復権』（ちくま新書、2003年）に詳しく紹介されている。こちらも一読をすすめたい。



『大学生からの「取材学」

：他人とつながるコミュニケーション力の育て方』

藤井誠二 著

【先生からのコメント】

『「少年A」被害者遺族の慟哭』小学館新書、2015年）、『黙秘の壁：名古屋・漫画喫茶女性従業員はなぜ死んだのか』（潮出版社、2018年）など、綿密な取材にもとづくノンフィクションを発表している藤井誠二が、取材の極意を大学生むけに分かりやすくまとめた本。藤井は、「自分と反対の意見を聴きだしたいという欲求は、立派な知的好奇心」であり、「取材学」を学ぶことで「他人とつながる力」を育てることができると述べる。読んでみると、誰かからじっくりと話を聴いてみたい気持ちになってきた。



『リケイ文芸同盟』

向井湘吾 著

【先生からのコメント】

根っからの理系を自任し、理科系の本の編集に生きがいを見出していた主人公が、文芸所の編集部に突然異動になり、心機一転、理系なアイデアを駆使して文芸書のベストセラーを生み出そうと挑戦する物語。著者の経歴を見ると大変な数学好きであるようだが、「濃密だが読みやすい」文章を書く作家である。久しぶりに手にとったところ、一気に読みしてしまった。本学では専門分野を異にする人同士が力を合わせる「文理融合」が特に期待されているが、そのためのヒントを本書から見つけれられると感じた。

2018年7月6日

近畿大学中央図書館